

〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成に向けて — 抽象を通して子どもの美しさの認識を更新する取り組み —

芦田 桃子

1 はじめに

「芸術は見えるものを再現するのではなく、見えるようにすることだ」と述べたのは、パウル・クレーである。岡崎（2018）は、『抽象の力』の中で、次のように述べる。

見える姿としては代表し表現することのできない、はるかに広い潜在的な領域こそが実在する。その実在はいかに把握されうるか。その能力が象徴あるいは抽象に託されている

造形科授業において、価値の更新を目指すにあたり、「抽象的、わかりにくい、不明瞭、曖昧、数値化・言語化できない、感覚的、即興的」といったものに新たなよさを見出すことは、自分にとって未知で不可解な〈他者〉を楽しみ続ける姿につながる。

2 抽象を取り入れる理由と授業の取り組み

改めて、抽象を取り入れる理由を以下にまとめる。

1. 自分自身を表そうとする活動において、具体的なものの形では表しきれないものが多くある。（自分づくりや自己表現にせまるための方法としての可能性。）
2. 既存の形に似ているかどうか（再現性・類似性）の価値基準だけでは、芸術のよさが味わいきれない。
3. 具象表現の価値偏重が高学年から生じやすい苦手意識につながることを防ぐ。
4. 物事の見方が一つではないことを体験できる。
5. パラアートや国際交流など文化や言語を超えた共感性を生み出す力がある。

抽象に関わる授業については、これまで毎年取り組んできた題材もあれば、新たに題材開発したものもある。そのうち、特に今年度成果をまとめたものは以下の授業についてである。

- ① 【第6学年】詩と版画（6~7月）
- ② 【第6学年】はさみで絵をかくように（9月）
- ③ 【第5学年】墨のうた（11月）
- ④ 【第1学年】手ざわりのあるおはなし（2月）

3 授業の実際

① 【第6学年】単元「詩と版画」

単元構成

第一次 彫り進み版画の技法と詩との出会い：〈他者〉との出会い

第二次 彫り進み版画の制作：創作と試行錯誤

第三次 詩と版画の融合世界：価値づけ、自己更新

本授業は、まず教師が事前に作成しておいた 30 編の詩集（教科書や既刊詩集から厳選したもの）を配布する。同時に、彫り進み版画の技法を動画で学び、版画のイメージを思い描きながら表現したい詩を選ばせる。詩とはそもそも抽象度の高い作品である。無駄を削ぎ落された言葉とその先に広がるイメージは、受け取る側の解釈によってさまざまに変化する。ここで抽象化されたことは次の3つである。

- 1) 言葉の世界（詩）をどう受け止めたか
- 2) 線や模様（彫り）の表し方
- 3) 色の重ね方

1) は、詩について想像したことや、自分に置き換えて想起した時の感情やイメージのことで、シンプルな言葉の世界以上に自己の内面に広がるイメージは人それぞれであり、抽象度は高い。

2) は、詩の中で出てきた固有名詞を再現するだけではない表し方にはどのようなものがあるか。特に、これまでに学んだ彫刻による線や面の表現経験が多様な表現につながることを期待した。

3) は、今回初めて取り組む彫り進み版画ならではの中間色や濁りのある色の表現との出会いが、色に関する固定概念を崩すことに期待した。

以上から、3つの抽象化の視点によって更新される美の認識は次の3点である。

- 1) 言葉を越えた表現のよさ
- 2) 具体物の形を越えた表現のよさ
- 3) 色の固定概念を越えた表現のよさ

【児童 A の作品「自分の一歩」】

自分の一歩 宮沢章二
いま わたしの踏みしめる一歩は
だれか他の人の一歩ではない
わたしの足が地上に刻む一歩は
いつでも わたし自身の一歩なのだ
…以下略…



児童Aは、デザインの理由を「自分の一歩と他の人の一歩は違うので、進む道を分けた。」と述べている。また、気に入ったところを「版がずれてしまい、色が上手に重ならなかったが、いい感じになった。」とした。よく見ると、2つの道の片方は、ぐにゃりと曲がり、真っ直ぐではない。道の周囲には楽しさも感じるが、数字や時計のような時間の経過を表すものも表されている。道別れした先には、小さな未来の扉が描かれている。これらは中学受験を控えたA児の期待や不安とも重なって見える。本児は、1)～3)の全てを達成したと考えるが、特に本児の言葉にあるように、「ずれてしまい、上手に重ならなかった」というマイナス表現の後に、それが「いい感じに」思えたことに、3)色の表現に関する美しさの認識が更新されたことが見取れる。

【児童Bの作品「はじめて小鳥がとんだとき」】



…一部抜粋…

はじめて小鳥がとんだとき 原田直友
うれしさとふあんで、小鳥の小さなむねは、
どきんどきん、大きく鳴っていた。
「心配しないで。」とかあさん鳥が、
やさしくかたをだいてやった。

児童Bは、デザインの理由を「小鳥が飛んだ躍動感や母さん鳥・父さん鳥のやさしさが版に表れるように工夫した。木々の小枝にも目が行くように模様を工夫した。」と述べている。こちらも自己の巣立ちに思いが重なるような詩だが、詩から感じた躍動感や優しさを、2)線や模様(彫り)の表し方の工夫により表現しようとしている。鳥や木は具体物の形だが、模様や色の表現によって軽やかさやたくましさを感じられる表現となっている。

【児童Cの作品「わたしと小鳥とすずと」】



児童Cは、「色を3色重ねたとき、きれいな色やイメージに合うようにつくりました。」と述べている。一見どの詩を選んだのか分からなかったこの作品に、「わたし」も「小鳥」も「すず」もそのままの姿では登場していない。しかし、彫りによる模様で違いがつけられ、互いに模様の線につながっている様子からは、3者のよさを尊重し合い、違いはあれど手を取り合っているイメージが伝わってくる。本人は色について言及しているが、特に2)具体物の形を超えることで普遍のメッセージ性を高めることにつながっていると言える。

その他、抽象の3つの視点に関わる児童の振り返りには次のようなものがあった。

1) 言葉の世界（詩）をどう受け止めたか。（言葉を超越する表現のよさ）

- ・（詩の）「歩きつづけ生き抜いた」という部分を意識して、曲りくねった道をたくさんかいた。
- ・同じ詩でも作品が全然違ってそれぞれの感じ方がわかってよかった。それぞれの作品にその人の心が出ていた。
- ・同じ詩の人でも暗い色を選んだ人と明るい色を選んだ人で絵の雰囲気が全く違っていたので面白かった。

2) 線や模様（彫り）の表し方。（具体物の形を超越する表現のよさ）

- ・タイトルに沿ってちょっと形を現実からはなしてみたりした。
- ・まどと+をかいて、+は音を表した。
- ・色合いと模様がマッチしているのが好き。

3) 色の重ね方。（色の固定概念を超越する表現のよさ）

- ・黄色と青の2色になってしまったけどいい具合にかすれて色がきれいなところが気に入った。
- ・雨の色に青にしようと思ったけど、緑になったがきれいだった。
- ・びみょうにずれてバグっているみたい（で気に入った）。
- ・色が少しずれたのですが、そこがまたとってもきれいで気に入っています。
- ・まわりの暗い色が上手く合わさって、予想外の色になった。

本単元を通して、印象や経験、イメージを表すために具象や再現性から離れて自由に発想した過程、中間色や濁った色に対し肯定的に捉える姿が読み取れ、これまではよさとして捉えにくかった美の認識が更新されたと評価できる。これは、言葉・形・色が持つ〈他者〉性を個々のアプローチによって受容し、認識を更新することにつながっている。

② 【第1学年】単元「いろとかたちとならべかた～手ざわりのあるおはなし」

単元構成

第一次 色・形・配置、用具の学習：〈他者〉との出会い

第二次 布コラージュ作品の鑑賞、創造的活動：創作と試行錯誤

第三次 お話づくりと作品鑑賞：価値づけ、自己更新

第一次では、4枚の限定された色・形の材料を操作、交流し、色や形や配置による印象の違いを体験的に学ばせる。操作を2回入れたことで、1回目と2回目で児童の見立てに関する変容が見取れた。1回目は多くの児童が三角の形の布から連想し、家に見立てたのだが、家以外に見立てをした児童の発想に触れることで、固定概念に縛られない視点を心得、2回目は十人十色の並べ方が生まれたのである。これは、制限のある材質と色と形が〈他者〉として立ち上がるが、想像と配置によって無限に広がることに気づくことで、〈他者〉とうまく関わる方法を

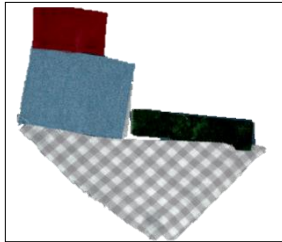


「テントの中の小さなつくえ」

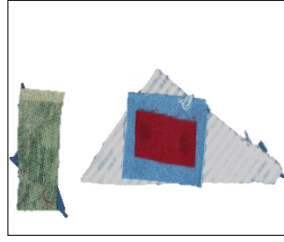
試行錯誤する姿だと言える。



「カンガルーのおなか」



「しょうぼうボート」



「こうちゃとうめぼし」



「小さなしんしつ」

第二次，第1時（本時）の目標と提案問題は次のとおりである。

【本時の目標】

- 布の作品を鑑賞して，色や形，並べ方から想像を広げている。
- 自分の思いを持ち，布の触った感じや不揃いの形を生かして，並べ方を工夫して表している。

【提案問題】

造形素材としての布に着目し，抽象化に近づいた鑑賞や表現の活動は，

- ①自己表現にせまる方法として適切だったか。
- ②よさや美しさの認識の更新につながったか。

①②の評価には，「見立て」「造形的特徴」「経験との関連」「試行錯誤」「自分なりの意味」といった言葉をキーワードに，次の2点について児童の姿があったかを見取る。

- ①「表したいことを見つけ，造形的特徴を生かして創作している。」
- ②「そのままの色や形でなくても，身近なものや自分の思いを表そうとしている。」

本時の前半では、『夜の絵』（筑摩書房 2019，柚木沙弥郎，村上亜土）の布コラージュ絵本を鑑賞する。布を用いた，シンプルな色・形・並べ方の中に，人や物へのやさしさや発見があふれている作品である。提示した作品についての児童の見立ては次のようであった。（作品は省略）

よるのゆきの日 / ふねから魚がつかれている / カモメのたいぐんとたまご
水玉もようのワンピース / しずかにながれる天の川 / とんかつとはし
まきずし / よるの水の中のいきもの / ふとんとまくら / こおりのうみ

これらは何でもありのものはなく，色・形・配置，そして布の素材感から豊かに感じ取ったイメージの広がりを見せている。その後，本作品の物語（この一場面のみ）を紹介する。柚木沙弥郎の布作品も素晴らしいが，村上亜土の文章も素晴らしく，一枚の絵に豊かな物語が広がっていることも一つの出会いと言える。

授業後半は，自らの制作に入る。前時よりも増えた布の材料から，選び取って作りだす。布の使い方については，「何枚使ってもよいが，手に取った布は使い切る」という約束にした。これは，材料の不自由さや自分の思い通りにはならない制限が必然的に抽象化につながり，不揃いな形や予定外の切れ端をどのように使うかという，

抽象による表現を取り入れることにつながると考えたからである。また、布が児童にとって思い通りに形成しにくいという点も〈他者〉として立ち上がり、その試行錯誤の過程で、美しさの認識の更新につながると考えた。

【児童の作品とお話について】

本時の最後には、作品名をつけることで「おはなし」を表現させた。しかし、児童の様子から、作品名には表しきれない「おはなし」の詳細が作品を通して広がっていることが感じられたため、後日「おはなし」をさらにくわしく記述させることにした。



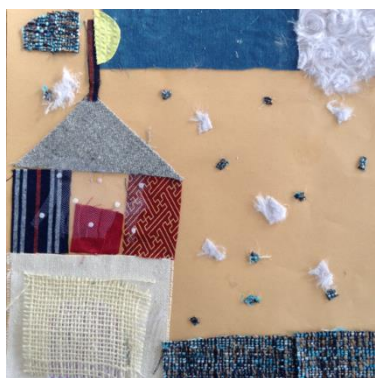
「さばくのよるのかかし」



「やっとみつけたたからもの」



「月がのぼりかけた町」



「よるのおしろとゆきのけっしょう」
よるのおしろはくらくなり、ゆきのけっしょうがふつてきた。おしろの門はしまったまま。よく見るとおしろの中につくえがある。あれはきっとごはんを食べるつくえでしょう。月はきらきらかがやいている。だれもおしろの中にいない。

提案問題①について、32名中、布の手ざわりや素材を生かして表したいことを見つけ、自分なりの意味につなげた表現と判断されるものは30名だった。2名は布を見立てて配置はしたが、そこに目に見える以上の物語や意味を持たせることについて不十分だと判断した。

提案問題②について、抽象的な表現を受容し、新たな表現につながった児童がほとんどだったが、①とは別の2名について具体物の形から離れにくい姿が見られた。

4 成果と課題

本研究に関して、教科のカリキュラム構想が進み、詩や物語といった国語領域との連動性を膨らませることにつながった。ただし、他教科と取り組みの時期や内容の調整、相互作用などについてはさらなる追究の余地が残った。